特248
649

純忠菊池氏

始

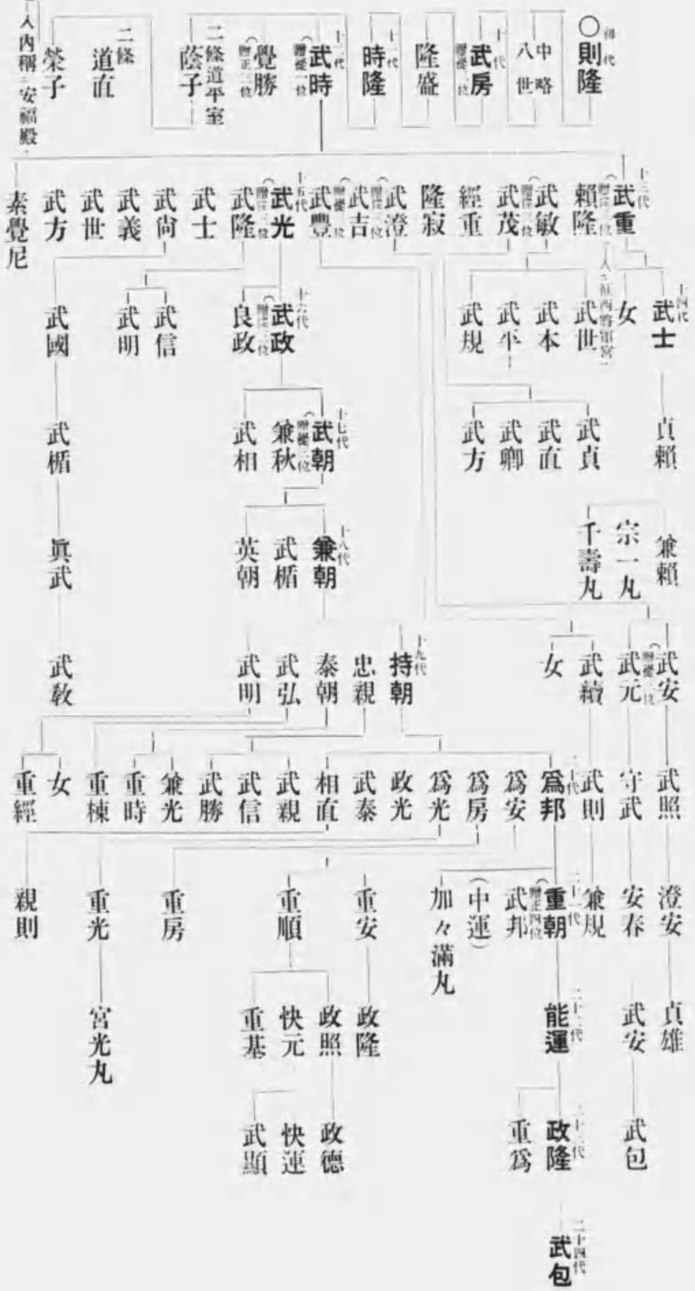
特248
649

菊池武時入道寂阿公肖像

（熊本縣玉名郡石貫村・寶福寺藏）

菊池家系圖

據「純忠菊地史乘」



緒言

何時の時代でも日本民族の一番大切な事は國民全體が一致團結して以て日本國を護り、皇室を尊崇し天子樣を敬愛し奉るといふ事だ。殊に刻下非常時日本に取つては尙更この思想が最大必要である。昔から日本に一致團結同心協力して日本國を護り、皇室を尊崇し、天子樣を敬愛し奉つた家は菊池氏以上の家は先づ無い。日本一の大忠臣と云へば大楠公であるといふ事は誰でも知つてゐるが、一家一族一致團結して日本國を護り、皇室を尊崇し、天子樣を敬愛し奉つた家は菊池氏が日本一だ。一人で日本一の大忠臣になる事も豪いには違ひないが、一家一族同心協力して日本一の大忠臣となる事は尙更貴い事だと思ふ。殊に昭和の今日、非常時日本の今日に於て然りだ。

菊池氏の人傑中、武時の英氣。武重の重厚。武茂の經綸。武澄の武勇。武敏の剛毅。武光の力量。武安武朝の堅忍等咸な一代に拔群なるものであるが、而も亦是等の特長を打して一團と爲して皇室を擁護し奉つた處に實に菊池氏の特色があると思ふ。就中、武光の代に及んで吉野朝の衰運に際し、勤王の諸將相踵いで歿し、人咸な足利を謳歌し、七道風を望んで豺狼を助くるの時に當つて、慨然として獨り西陲の地に卓つて、龍種を擁護し奉り征西府をして九州の天地に雄飛せしめ、太宰府を占據して十二年の久しき鎭西の靜謐を致せし如き。單に吉野朝後半史に燦爛たる光輝を放たしめたるのみに非ず、實に是れ日本歷史の花、忠臣義士の龜鑑である。古句に「歌書よりも歷史にかなし吉野山」といふのがあ

るが、實に南朝史を讀んで泣かざる者は恐らく日本人種ではあるまい。殊に吾人は菊池史を讀むに及んで幾度泣かされたか知れない。博多合戰。多々良濱戰。太宰府陷落。水島臺戰。蜷打合戰。菊池城陷落等到底涙無くして讀過する事は能きないものがある。彼武光、武政死し、賀々丸時代に及んで內憂外患交々臻り、加ふるに老獪今川軍の驕暴を逞しうするに會し、悲風慘雨天地を動じ、鬼神を泣かしむる底のものがある。兎に角、皇室中心主義に活きる日本人が、菊池氏程の大忠臣を忘れてゐては相濟むまい。

時人は口を開けば非常時、非常時と云ふが、而も實際に非常時といふ事をカッキリと意識し、覺悟して日用生活上にも之を表現してをる者が何程あるか。又思想國難の聲も喧しいが、何の效果もない理論理窟を捏ね廻したのでは駄目である。現代はもつと〳〵實際的、直接的で、根底あり、力量あり、ドッシりとした、禪家に謂ゆる鐵牛之機でなくては駄目だ。吾人が菊池氏を顯彰せんと欲する所以のものは、左傾にあらざれば右傾、右傾にあらざれば左傾といふ如き思想的分裂も止め。政黨政派の爭奪。階級的反目。勞資間の鬪爭そんな分裂も皆止めて、出征軍人同樣緊張した氣分になり、國民全體が一致團結して、此非常時日本に善處し。建國日本精神を强調し。以て昭和の天業を成就し。天壤無窮の皇運を扶翼し奉らねばならぬ。

昭和八年三月十三日

著者識す

謝語。本書刊行に際し、德富蘇峰先生の特に外題御揮毫を賜ふを感謝す。

純忠菊池氏　目次

寫眞
系圖
緒言
一　菊池家祖と武房の武功……一
二　博多合戰と武時の殉節……一
三　三郎賴隆と狂女物語……三
四　武時武重袖ケ浦の訣別……五
五　武重の人物と菊池家憲……六
六　武敏尊氏と多々良濱に戰ふ……一〇

目次

七　武士の勇退と祖禪寂照……一一
八　武澄の奮闘……一三
九　筑後川大合戰……一三
一〇　太宰府占領と武光の武功……一七
一一　武政の苦衷……一八
一二　賀々丸の奮闘と水島臺合戰……一九
一三　武義武安の武功と蜷打合戰……二〇
一四　菊池城陷落……二三
一五　重朝と菊池文學……二三
一六　菊池一族と師匠大智……二四
完

純忠菊池氏

村上素道著

一　菊池家祖と武房の武功

菊池家の先祖は藤原道隆の子隆家が太宰權帥に任ぜられて九州に下つて刀伊の來寇に殊勳を策てゝ已來、隆家の孫の則隆に至つて肥後國菊池郡に移り、其險要と沃壤とに據つて此處に土着して菊池と名乘つた。由つて則隆を以て菊池家の初代とする。かくて六代隆直は安德天皇の御西狩に扈從し、嫡子隆長三男秀直已下數輩と俱に天皇に殉じ奉つた。八代能隆は承久の亂に其身大番役に居り乍り後鳥羽天皇に屬し奉つた。十代武房は文永の役に一族郎從五百餘を率ゐて赤阪の高地を固め、痛快なる武者振りを發揮し、元軍を擊退した。又弘安の役にも今津灣生の松原に布陣し、英氣勃々遂に元軍をして一歩も上陸せしめなかつた。菊池家は祖先以來一種英靈の氣慨を傳へて何時も節に殉じ、正義に與みし、一朝國家有事の際には平生の怨讐を忘れて、大義に赴くといふ日本武士の本領を發揮した。

大正四年十一月十日武房に從三位を贈らせ給ふ。

二　博多合戰と武時の殉節

十二代武時は菊池家の中興であり、又其の武功談は本篇の中心を爲すもので、尤も多く語りたいと思ふが、紙數に限りがあるから最後殉節の一段だけに止める。武時は幼名を正龍丸と云ひ、十三歲にして襲封し、文武兩道に達し、殊に深く禪學に志し、入道して寂阿と稱し、其師大智に參じて心膽

を練り佛祖の大事に通曉した。武時一代の活躍は元弘三年三月十三日筑前博多に於ける探題攻撃の一擧である。此一擧は不幸にして失敗に終つたが、而も武時勤王の先驅とその悲絶慘絶を極めた殉節討死は遂に能く九州全土の動搖を來し、惹いて日本全國の武士に一大衝動を與へた。

十三日朝四時頃宿衛してゐた息濱を打立つと同時に、兼て連合を約してゐた小貳貞經入道妙惠、大友貞宗入道具簡の軍へ使者を立て其出陣を促した。處が小貳は早くも變心して其使を斬つた。大友への使は遁早く遁れ歸つた。此處に於て武時は兼てサモあらんと豫知してゐたから、何ぞ今更驚かん、遂に最後の覺悟を極め、先頭に燦爛たる錦旗を捧げ、揃ひ鷹羽の旗、一門の旗等を磯風に飜し、松原口から辻堂を經て所在に火を放つて探題屋敷へ押寄せた。折柄猛火は風に煽られ直進能きないので、早良小路を吶喊して進んだ。戰鬪は開始された。英時が憑み切つたる武田八郎は重傷を負ひ、安富左近將監、竹井孫七、同孫八、齋藤日向二郎は討たれた。武時は勝に乘じて進軍し、一手は大手に向はしめ、自ら一手を率ゐて櫛田濱口から向つた。義を金石の重きに類し、命を塵芥の輕きに比したる菊池勢は猛烈に突擊した。英時は其勢に當り兼ね、既に自害せんとした。時しも小貳大友の

大軍は菊池軍の背後から鬨の聲を擧げ犇々と攻め掛けた。是に於て戰局は一變した。武時は今は斯うと覺悟を極め、袖ケ浦に嫡子二郎武重を呼んで諄々と訣別し。今は思ふ事なしとて百騎ばかりの手勢を前後に立て、犬射馬場（今の博多停車場附近）に於て散々に戰ひ、其子三郎賴隆、同大圓寺阿日房隆寂と共に壯烈なる戰死を遂げた。大手から進んだ武時の弟二郎三郎入道覺勝は殘兵七十餘騎を率ゐ、猛然として塀を乘り越え、城戸を押破つて庭内へ闖入し、遂に一歩も引かず、又向ふ敵と引組み〳〵落ち重なり、一人も殘らず討死した。

戰後四五日武時、覺勝、賴隆三人の頸は「謀反人等頸事」と頭書した銘札の下に、晝は梟首し、夜は探題屋敷へ取入れ、約十日後は釘にて打付け、長日に梟首された。郎從達の頸數百は五ヶ所に三重に木を結渡して懸けられた、凄慘たる光景は附近一帶に流れて轉た鬼氣相逼るものがあつた。

正成の湊川自刄の光景も凄慘たるものがあつたが、何といふても自刄したのは切めてもの慰安だ。況んや其頸は頸桶に容れられ、敵將尊氏の手から遺族の許へ送り、妻子の手に由つて手厚く葬られたに於ては慘劇中にも幾分の慰めがある。然るに菊池の頸は釘付にして長日に梟首した、南朝第一の大

忠臣の頸を長日梟首したといふに至つては、六百年後の今日に於ても實に悲憤慷慨の至りだ。況んや當時此事を傳聞した遺族や有緣の者は何のやうに悲しんだ事であらう。遺族有緣ばかりではない、心ある天下の武士は、菊池に同情すると同時に、小貳、大友の武士らしくもない態度を非難し、憤慨し、痛罵し、唾棄した。小貳、大友は三月十三日には探題に諂つて菊池を殺し、五月二十六日には天下の形勢が變つたといふて探題英時を害した。行路難行路難山に非ず河に非ず人情反覆の中に在り、今も昔も慨むべきは無節操の徒、無定見の徒だ。

扨武時が日本武士の本領を發揮し、小貳、大友の後詰と聞いても一念退却の途に出でず、味方に十倍せる八千といふ大敵を物の數ともせず、一意專心勅命を奉じ朝敵を討たんと、敢然として一歩も退かず、勇往邁進突擊奮戰、遂に一族郎從を擧げて大義に殉じ、勤王の爲に殪れたといふ事は、實に是れ一大慘劇、一大血涙史であると同時に又是れ建武中興の花であり、日本武士の龜鑑である。

後醍醐天皇京都へ還御になり、一日義貞、正成、長年等出仕の日論功行賞の御沙汰があつた。時に正成の奏上に「元弘忠烈者勞功輩これ多しと雖も何づれも皆身命を存する者、獨り勅諚に依つて一命を墜とす者は武時入道なり、忠厚尤も第一たる歟云云。此條叡聞に達するの由世に以て其隱れ無き者なり（武朝申狀）」とある。して見ると武時の功績は畏くも後醍醐天皇の叡聞に達し忠厚第一と御認めになつた。是れに依つて直に長子武重は肥後守に、弟武澄は肥前守に、同武茂は對馬守に、同武敏は掃部助に叙任され、破格の恩典に浴した。

此處に讀者の注意を喚起しておきたい事は武時の殉節元弘三年三月は楠公の湊川戰死より三年三ヶ月以前といふ事である。楠公は菊池家の殉節を他の何人よりも同情し稱揚し感歎してをられたといふ。

明治天皇は武時の斯くの如き功績を思召され、明治十一年別格官幣社に。同十六年從三位を。同三十五年十一月十二日從一位を覺勝には大正十三年二月十一日正三位を贈らせ給ふ。賴隆、隆寂は未贈位。

三　三郎賴隆と狂女物語

『博多日記』に一種悲哀な挿話がある。それは彼三月十五日

の戰後、二十二日を過ぎた四月四日の記事である。其日彼の懸置きたる梟首を見物に來た一婦人があつて、その凄慘たる有樣を見るなり身毛を竪て、やがて精神錯亂した。時に一兩人の僧あり、彼女を勞はり、彼女の宿に往いて對面した、時に彼狂女は起ち上つて男の風情して扇を取直し、僧に向つて禮儀を正し、僧を上座に請じて、我は下座に畏まる。僧問ふ「如何なる人にておはするぞや」狂女「我は菊池入道の甥(息若くは男の誤りか)に左衛門三郎と申す者にて候、童名菊一と申して有智山(太宰府附近)にて稚兒にて候ひし、人みな知りて候。但し此度菊池にて新妻を迎へて十六日目と申すに菊池を罷出し時に彼新妻に語りて、相構へて今度の合戰に別條なく、無事に歸りて相見ばやと申きけ候ひしに、彼妻頻りに涙を流し、稍ありて袴をつけ候ひし時、袴の腰をあて、候ひし、其時の面影今に忘られず、乃ち我が額の髪を截りて彼妻に渡し、妻も亦髪を斷りて我に渡す、其髪を守袋に入れて頸にかけ、犬射馬場にて討死候ひし時まで持ちて候ひし。」と語りて哀愁の色を浮べて涙を流す。稍ありて又樣子を變へ「敵を討果さで死したるこそ口惜けれ。」とて目をむきて怒れる氣色すさまし。又曰く「我れ息濱を打出し時、夜更くるまで酒を呑みし故、喉乾きて水の欲しかりしを、あたりに水無きまゝ飲まずして打立ちしが、戰になり、働き候ひし程に、いよ〳〵喉乾きて苦しく、水飲まずして死して候ひし程に、水の欲しく候、水を賜はれ。」とて水を乞ひ小桶に二杯飲み。「我は上口にて酒も好み候、酒も賜はらばや、」とて酒も一提呑みけり。やがて「水を呑まずして死して候ひし程に、我には常に水をマツリて賜はれ。」又「後世をとぶらひて給ひ候へ。」と申てけり。其翌日、僧達又彼狂女を訪ねて、かゝる冦弱な女性の許に御わたり候は違ひ候。」狂女「家をもたず候て此の如く候。」僧「家をつくりて參らせ候はん。」とて率都婆を取出して文字書きけるに「我名を率都婆に書かれぬ」と申しければ、やがて言ふまゝに字名を率都婆に書き「松原に立てに往かん」といへば「御供仕るべし」と申して、狂女は其儘倒れ

博多七隈菊池神社全景

臥し、やがて正氣に復しけり。

妻女に別れを告げし以下、聞く者をして轉た腸を斷つの感あらしめるものがある。人生の悲哀慘劇何事か是れ以上に出づるものがあらう。左衛門三郎とは果して何人か、或は三郎頼隆ではあるまいか。此挿話は我等に種々なる暗示を與へる、それは武時戰歿地の推定にも、或は現在武時公墳墓が博多の七隈と馬場頭(谷)と兩方に在つて、一は首塚、一は胴塚であらうが、何れにしても武時公墓といふに異論はないから今少し立派に(現今は村社)祭祀したいものである。と同時に此の挿話の示す正しく戰死の跡たる松原(博多市街續きの松原地帶)に一大記念塔か銅像でも建てたい、而して湊川といへば楠公、博多といへば菊池公といふやうに全國民の頭腦にはつきり刻み込みたいものである。

四　武時武重袖ケ浦の訣別

武時、小貳大友の大軍漸く逼れるを見て今は斯うと覺悟を極め、嫡子武重をトある樹下に喚んで「我今小貳大友に出拔かれて戰場の死に赴くと雖も、義の當る處を思ふが故に命を隈さん事を悔いず。然れば寂阿に於ては英時が城を枕にして討死すべし、汝は錦旗を守護し急ぎ本國へ歸り、父が志しを繼ぎ、一族郎黨を集め、城を堅うし再び忠義の軍を起し、朝敵を平定し、宸襟を安んじ奉り、我が生前の恨みを死後に報ぜよ。」と時に武重は落涙を拭ひ「こは仰せに候へどモ一

武時武重博多袖ヶ浦訣別之圖

人の父の今討死せんとて大敵に向ふを見捨て、いかで我單り本國に歸るべき、一處にてこそ兎も角もなり候はめ。」とて中々歸らうとはせぬ。武時聲荒らげ「汝は日頃思量拔群たるにも似ず、此期に臨んで我が言を聞分けずや。凡そ小信を守つて大義を忘るゝは良將勇士の恥る所、我は朝家の御爲に命をこゝに止む。汝は此處を遁れて節に當つて一命を奉るべし、遲速ありといへども何づれか死を免れんや。今日汝を歸すのは私家のためならず天下の御爲なるぞ。」と父の教訓山よりも重し。武重深く感激し、涙を揮つて歸國を諾す。武時は昨夜認め置きたる「古里に今宵ばかりの命とも知らでや人の我を待つらん」の歌と鎧の內衣（此衣後に武時の末子了心素覺尼に傳はり、尼之を袈裟に仕立て一生被着すと云ふ。現に山鹿の日輪寺に在り。）とを取出し、故鄕に遺し置きたる妻子への形見として之を托し、「イザ時刻移るぞ早く落ちよ。」と詞烈しく急き立てる、武重は返す詞もなく、離別の涙に鎧の袖を絞りつゝ、葉室吉宗以下郎黨五十餘騎を隨へて、悄々として肥後路に赴いたのである。

世の中に悲劇といふ事も澤山あるが、死別よりも生別は一段と悲しい。中にも武時、武重父子の訣別程悲しいものは多くあるまい。そは當時の事情があまりに忽劇の中であつたといふ事と。急轉直下戰局の非況に陷れる場合といひ、且つは彼楠氏櫻井驛のソレと事變り、武重が二十三四歲にも達してゐられ、人情も發達し、人一倍思慮拔群の人であつたと云ふに至つては、此の訣別は一層悲壯哀絕なものがあつたに違ひない。

五　武重の人物と菊池家憲

十三代武重は武時の長子で、十七人の兄弟中尤も傑出した人物である、一番長く武時の庭訓を受け、師匠大智の薰陶も他の兄弟の誰よりも親しく稟け、一時は入寺して弟子同然專門的修養を積まれたらしい。雪中示寂山「五首や『十二時法語』は大智の熱心な教誡振りを窺ふと同時に、武重の造詣の尋常でなかつた事が判る、斯人にして此修養ありだ。斯ういふ譯で武時戰死の時、武重を諭し歸したのは深き思慮があつたのだ。自分に代つて一家の棟梁となり、上皇室に對し奉り、謂ゆる天下の御大事にも、又一族郎黨統帥の爲にも、武重ならではと兼て思つたからだ。扨武重の武勳は若年頃の事は一

向知れないが、建武二年二月十一日箱根合戰には先陣の大將として足利直義の鋭鋒を挫いた。此時竹の先に小刀を結付けて敵を惱ましたのが謂ゆる「菊池千本鎗」の起源である。次には同三年正月十日山城大渡りに於て尊氏を迎へ戰つた。又延元元年四月弟武吉等と俱に脇屋義助と力を協せて船坂山を攻めた。同五月二十五日尊氏九州より攻め上ると聞いて兵庫に來り、義貞と會し、須磨口を防ぐ。時に武重、正成の戰況を氣遣ひ、弟武吉をして視察せしめた。武吉至るに及んで正成は已に弟正季と刺違へんとするに會す。正成、武吉を見て莞爾と笑ひ「七郎殿今は何をか申さん、幸に此樣を御兄上に傳へて候へ。」武吉「七郎も男兒にて候、御樣を見て何れへか參るべき、只御供に連れさせ給へ。」とて同時に割腹した。武重は義貞と同じく京都へ退きしが、其後叡山、京都、花山院と天皇に供奉し奉つてゐた爲に、一時尊氏のために拘禁せられたが、警固の士の怠りを窺つて遁れ出で、夜を日に繼いで九州へ下り、豐後路から阿蘇を經て難無く歸國した。此際にも最先に師匠大智を省覲して大般若祈禱の禮を陳べてゐる。此大般若祈禱に就て大智の手形を捺した文書が廣福寺に保管されてゐる。此書は正平十九年二月二十三日付武光に送つたものを後に廣福寺に納めたのである、其大體を語ると、廣福寺は武時の發願で、武重、武士、武光の三代かゝつて建立した

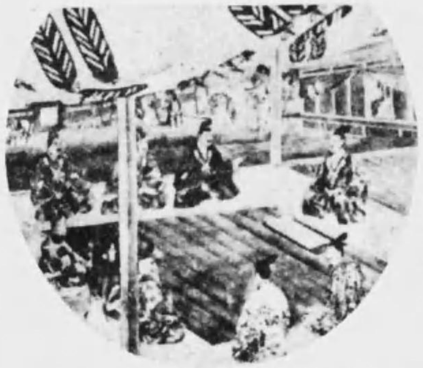
武重と竹箱根竿竹に短刀を結ひ大つけ下に之を破る直義の軍

武吉と兄武重に忍び正成に命を共にすることを自刃せんと決する戰況を去る會し

大伽藍であつたが、不幸にして今歳野燒の火に罹つて類燒したので、再建を依頼し、且つ附近で野燒を禁制してくれといふ依頼狀である。其序に「……歡喜殿（武重の法號）豐後より引かれ候ひしに所々の難所をきりふたぎ候て飛鳥ならでは人のとをるべき樣も候はずときこしめされ候て惠良殿この寺を深く御賴み候て大般若を轉讀候ひし時、――愚身啓白して信心をこらして大般若を讀誦五ヶ日の中に歡喜殿歸國候て、再御目にかゝりて御悅び候ひし事不思議の靈驗に候歟、よも思召し忘れ候はず、しかのみならず阿蘇第一のせつ所をきりふさぎて、凡夫のとほるまじき樣に城をこしらへて候ひしを菊池殿をはじめて諸大名の手よりもやぶらず、迫間殿打破りて透られ候て、九州にかたき御方昔よりなき程の名をあけられ候て、歡喜殿を事ゆゑなくとほされて候ひし、思出候へば、併大般若の十六善神の御力をあらはされ候事いかでか御報謝なくては候べき――」此文書は頗る興味あるもので、武重が少人數で遠く京都から九州へ渡り、豐後路から阿蘇を越えて歸國せようとするに、豐後にも阿蘇にも難處々々に敵が路を塞ぎて飛鳥ならでは、越せぬといふ注進が頻りなるに、然るに此時菊池は多々良濱敗戰後で、或は武敏も武茂も筑後出征中であつたか、何分勢力を失つた際で、彼難處を切開くべき軍勢が催せない。ソコで惠良殿卽ち武重の奧方（惠良惟澄の女）が鳳儀山聖護寺の師匠大智に大般若轉讀を依賴して般若守護の十六善神の御加護を祈り、自身も亦寺に籠つて晝夜となくお禱りを捧げた。大智も自身啓白文を作つて一心に丹誠を凝らして禱つた。一方迫間殿（十郎武門）が千々波、矢上等の豪傑と共に此難所を斬り開いて、御祈禱五ヶ日目といふに無事に歸着した。ソコで一同活き返つた如き思ひをして歡んだ。其時の事はよもや一族中誰も忘れる者はあるまい。此老僧も思出す度に不思議に思ひ、且つ十六善神の加被力を有難く存ずるのである。されば其御報謝は忘れてはなりますまいといふのである。此書が二月二十三日に發せられて、其七月十六日に禁制、玉名庄石貫村野燒事云云といふ一札が出て、それには藤原判と領主の極印があつて結局り武光の命で嚴重な禁札が立てられたのである。

扨、武重は菊池に歸着すると同時に、直に武敏、武茂等と力を協せ、寺尾野城に旗を立てた、其迅きこと風の如しとは武重の如きを云ふか、宛然鵬を負へる虎の如し、以て幕將一色範氏の軍に對抗した。遂に範氏の弟頼行を豊城郡犬塚原に破つて頼行を殺し、範氏を筑前に走らせた。又延元二年五月には弟武豐をして筑後に進出せしめ、以て一色の將重義を討

ち、筑後を略せしめ。又阿蘇惟澄と共に合志城を陷れた。偶尊氏書を送つて勸誘するに會ふや、酬ゆるに「我れ是れ廷臣なり、豈に畜類の徒に隨はんや。」を以てした。此時に當つて宮三位中將は征西將軍宮の先發として菊池城へ御着きになつた。此に於て士氣益々振ふ。延元三年武重自ら筑後に進出し、石垣山に於て小貳賴尙と戰ふ。互に死傷あり。同月二十七日鳳儀山聖護寺（大智の爲に建つる所）へ一里四方の土地の寄進狀を納む。又同年七月二十五日、彼有名なる菊池家憲を制定した。是れ蓋し武重の思想を知るべき第一の資料で、全篇三條より成り、これぞ菊池歷代一致團結同心協力せし其根源を爲す所以のもので、彼の伊藤公が憲法制定の際是を參考資料としたといふから、是の一事にても其價値は知れる。扨延元元年に正成、長年死し。同三年五月に顯家死し、七月義貞死す。而して現に御幼年の征西將軍宮菊池を指して御西下中なり、武重は前後を顧み將來を憂慮し、一家一族を擧げて結束し、大義の赴く所を徹底せしめ、一致團結同心協力、以て王事に盡さしめんと、先づ以て神明に誓ひ、師匠大智に此家憲（卽ち起請文）を納めたのである。武重が如何に鐵心石腸を陶鑄し、熱烈に大智に歸依してゐたかは此一事でも解る。家憲の外に四通の文書が殘つてをる、何づれも內容筆蹟共に堂々たるものである。又彼家憲に對して管領武茂は一族を代表して長文の起請文を納れて、武重の家憲を更に委しうしてをる。文中に「仕朝立身」と云ひ、當世に諂へる武士の心を永く離るべし。……生生世世必ず一生生れ値ひ奉り、結二師弟之緣、……若壞斯起請文之旨、候者三寶佛祖天龍護法善神の冥罰を武茂が八萬四千の毛孔ごとに罷り蒙つて今生には白癩黑癩の病を受け、當來には七生まで佛法に不可奉値候」大した猛烈な發願だ。



武重家憲を制定し寄合內談衆を會す

明治三十五年十一月十二日武重に從三位を。大正十三年二月十一日武吉に從三位を贈らせ給ふ。

六　武敏尊氏と多々良濱に戰ふ

話が前に戻る。武重、武吉等は上洛し、武茂、武敏は在國して遍かに武重と相呼應してゐた。而して武茂は内に在つて政務を處理し、武敏は外に在つて軍事に當る、爲に菊池の勢威大いに振つた。時に尊氏は京師に破れ、兵庫より海路を取つて二月二十日赤間關に着し、少貳、龍造寺、中原、島津等の來迎を受け、徐に九州平定の謀計を運らした。延元元年二月二十七日、武敏は尊氏已に九州に來ると聞き、大軍を率ゐて北上し、先づ太宰府の小貳貞經を討たんとした。貞經は託磨之親、同貞政等をして之を筑後に要擊せしめたが、反つて大いに武敏に破られた。武敏は進んで高良山に陣す。貞經は原田、畔倉を先鋒として高良山を攻んとした。武敏逆襲して大いに之を破る。此時に當り阿蘇、黑木、三原、秋月等官軍に屬し、官軍の勢旭日昇天の觀あり。武敏は尊氏の來らざるに先だつて太宰府を陷れんとして急に之を攻む。貞經遁れて少貳の本城有智山城に栖籠る。武敏急に之を攻圍す、

貞經防戰大いに努めたが、城遂に陷り、貞經は自殺した。武敏此に於て父武時の仇を報ずる事を得た。是れ卽ち二月二十九日であつた。尊氏は又此日を以て筑前蘆屋浦に着した。武敏は貞經を討ち、進んで博多に入り、尊氏と雌雄を決せんとした。三十日尊氏は賴尙を先鋒として一旦宗像に入つたが、武敏の機先を制せんとして直に南進した。武敏多々良濱に陣を布く。尊氏菊池軍の甚だ旺なるを望見して其到底勝算なきを知り自刄せんとした。直義見て大いに驚き切に之を止めた。而して自ら仁木、細川、上杉、畠山等の兵を率ゐて菊池軍に迫る。尊氏は高、大友、島津、千葉、宇都宮等を本軍とし、別に賴尙をして東方に陣せしめた。兩軍鋒を交ゆるに及んで官軍の勢頗る旺なりしが、此日天官軍に幸せず、北風砂塵を擧けて面を向くべくもなし。加ふるに高地より俯射せらるゝの苦境に立つた。止むなく一旦須濱まで退く、されど武敏少しも躊躇せず敵陣中に入つて奮戰したので、爲に形勢一變足利軍大いに亂れた。時に直義使を尊氏に遣はし、錦の直垂の右袖を切つて之を贈り「直義防戰仕る間に、早く長門周防に渡り再擧を圖り給へ。」と悲痛な言を申送つた。是れを見た將士は感激して死を決し、奮戰これ努めた。此に於て形勢又一變し、官軍遂に利あらず、城、赤星等傷き、死傷尤も多かつた。武敏は無念の齒を嚙みつゝ、主力は筑後方面に退却し、黑木城其他を保つたが、仁木義長、上野賴兼等に攻められ、三月十七日黑木城陷り、武敏も肥後に退いて一息した。尊氏は菊池の外は大概歸順したので、一色範氏を九州探題として博多に殘し、託磨之親を首め豐、筑、肥の諸族に博多を警固せしめ、四月九日に少貳、大友の軍を率ゐて太宰府を發した。而して赤間關で武敏の再起を聞いて義長を還らしめ、自らは東上した。武敏は爾後屢〻一色軍、仁木軍と戰つて互に勝敗あつたが、遂に菊池に退いて一息した。此外武敏の武功は數多あるが今は且らく此に止める。

大正四年十一月十日武敏に從三位を贈らせ給ふ。

七　武士の勇退と祖禪寂照

十四代武士は武重の養子で、實は武時の子武重の弟である。武重程の人物に見込まれ、又彼菊池家の重大時期に於て他の兄弟親族も之を納得して家督を繼いだといふのだから何づれ傑出した人物に違ひない。處が家督後僅四五年の興國五年に二十一歲といふ靑年を以て勇退したといふには其處には何か事情がある筈だ。一說に武士は蒲柳の質で攻城野戰に從事すること思はしからず、父祖の業を失墜せんことを憂ひて退職を決心したと云ひ。又一說には短命の相があるとて師匠大智に相談すると「出家して道業を勵んだら長壽せよう。」と言はれたので、遂に決心退職したとある。何づれにしても靑年にして出家し大智の弟子となり、名を祖禪寂照と改め、業成りて後加州祇陀寺（大智の開山地）の住職と爲り、晩年には又故鄕肥後に歸つたと云ふ。出家の際大智が與へた一絕がある。澄圓心入道場虛。月印寒潭轉玉壺。開眼不成三際夢。迢々劫外一身孤。

『武朝申狀』に「その後武士彼の武名を相續せしめ肥後筑後の間を馳廻つて度々の合戰を致し、遠近の官軍を護持せしめをはんぬ。」とあるを見れば一時は目覺ましい活躍振りで、內外戎な歸伏してゐたのである。廣福寺に武士が大智に納めた文書が四通保存されてゐる。中一通は完く退職屆で、大智の手を經て南朝へ其執奏方を願はれたものだ。又一通は「武士が跡を乙阿迦に讓り候へども――そこの御計らひとして何づれの兄弟一族の中にても――」とあつて相續人選定をも完く大智に依賴してゐる。文中の乙阿迦といふのは武光の幼名だ

と斷ずる人もあるが如何か、乙阿迦丸の起請文も一通現存してをる。萩北郡二見村松吟菴（現今正福寺）は武士の寂照が終焉の地と云ふ。武士は未贈位。

八　武澄の奮闘

肥前守武澄は長兄武重に次いで深く大智に歸依し、一家族擧つて子の武安、武元、孫の武照等、咸く父母の如く世出世に付けて信賴してゐた。武澄の臨終に特に大智を請じ、拜謁したい事があるから山を下つて下されとて招請した文書が殘つてをる。又は山野田畑敷地を寄進した寄進狀もある。又大智の慈雲禪定門（武澄の法名）の爲にした秉炬法語が殘つてゐて語中に大將軍としての武德が稱へてある。武澄の武功は正平九年八月船に搭して肥前島原に赴き、多比良城を攻め、九月九日之を陷れた。同十年八月征西將軍宮を奉じ、筑後賴貴、木屋行實、有馬澄明等を率ゐて、十八日菊池を發して肥前に向ひ、九月一日國府に入り、先づ小城城を陷れて千葉氏を服し、進んで筑前に至り菊池、五條、深堀、木屋等の諸軍と會し、大擧して豐後日田に入り玖珠、由布、狹間を過ぎ、到る處の敵を擊摧し、十月二十五日遂に豐後の國府に入つて大友氏泰を降し、更に大神を經て豐前に入り宇佐に戰ひ、城井を攻めて宇都宮守綱を降し。進んで筑前に出で博多に入つた。此迅雷の如き破竹の勢に敵し難く、採題一色父子は遂に多年の九州經營を斷念し海を越えて長門に遁走した。かくて武澄は數月にして筑、豐、肥前後の六ヶ國を平定し、威武堂々菊池に凱旋した。武澄の活躍の今日に知れてをるのは多く正平年間の事に屬し、武光は南征して薩、隅、日の官軍と謀つて武家方を攻め。武澄は親王を奉じて主として北征の局に當つてゐた。廣福寺藏菊池家總位牌の一軸に武澄一家の事を「肥前殿歴代尊靈」としてある。先年武安へ御贈位の際は此位牌の前で策命使が宣命を讀まれた。武安討死の蟻打といふ土地が判らず隨つて墳墓が無いからだ。

大正十三年二月十一日武澄に從三位を贈らせ給ふ。

九　筑後川大合戰

正平十四年五月武光は少貳賴尚を滅ぼさんと籌策を回らした。抑賴尚は官軍の力を藉りて年來の仇敵一色一族を放逐し、殊に正平八年古浦城にて一死を助けられ乍ら、今又忽然官軍に抗す、武光爭か彼を打たざらんやだ。懷良親王は正平三年宇土御上陸より既に十餘年、波瀾萬丈の九州の天地に成長し、剛毅雄邁の御氣象益募らせられ、齡已に三十前後に達し給ひ、自ら三軍を提さけ兇賊を誅せんとの意氣旺にならせ給ふた。かくて薩摩大隅日向の兵を召し、其來會に及んで武光は武澄、武政、武信、武明、武貫等を率ゐ、親王亦五條良氏、良遠、新田一族及び冦從せる月卿雲客を從へ、共に菊池を發し給ふ。沿道所在の官軍を糾合し、其兵四萬軍容堂々筑後に進出し高良山、柳坂、水縄山、及び國府に布陣す。

賴尚は先に太宰府を發し、豐前筑前肥前地方の諸族を誘ひ、其子直貢、甥賴泰、松浦、龍造寺、深堀諸氏、並に肥後、薩摩の北黨の大軍を率ゐて七月初旬筑後に前進す、其兵六萬と稱す。かくて鑵坂庄に至り、官軍の筑後川を渡るを俟ち、其半渡に乘じて之を擊たんとす、此に於て兩軍は筑後川を挾んで相對峙した。

官軍は國府に親王の率ひ給ふ六千人を駐め、府中、高良山に武光の手兵八千人を、其餘は毘沙門嶽、柳坂、兜山、水縄山一帶に配置し、筑後川附近に物見兵を嚴にした。武光は敵陣の狀況を探知し、攻勢に出でず、敵の渡河し來るを俟つて之を擊たんとし、五千人を神代、大社の渡場邊に潛在せしめ、備へを緩うして敵を誘つたが、敵は相警めて敢て出でず。武光此狀を見我より攻擊せんと決意し、決死の兵を選び夜に乘じて淺瀨を徒涉し、拂曉前に鑵坂の敵に夜襲を掛け、其亂るゝを機として主力を以て正面より渡河し、鑵坂の敵を攻擊せんとした。かくて五千の精兵は武光自ら指揮し七月十九日の夜運動を始め、神代渡以東の淺瀨を渡りて隊伍を整へ肅として鑵坂を西北に見て前進した。二十日丑刻鑵坂に至れば少貳の陣寂として聲無し、已に里餘退きて大保野附近に移つたのだ。武光乃ち遂ふて岩田附近に至るに天漸く明るく、先頭隊は沼を渡りて進まんとせしも沼中の路は鑿斷せられて進むべきやうもなし、沼を隔てゝ敵を望めば堂島高樋に亙る高地は旌旗天を蔽ひて陣形整頓し、西北方大保原方面は敵已に陣地を占領し、而も前に沼あり是亦進擊すべくもない。江南にありて渡河の機を待ちし官軍の本隊は、天明に敵已に退くを知り、神代杜渡より渡つて進み、二十一日には岩田福童に陣を布き敵と相對峙した。時に少貳軍は主力を小野原、大保野一帶に置き、其部署は小郡附近には直貢、武藤の兵一萬

七八千を以て前進隊とし、西島高地には賴泰等の二萬人、力武南方高地には賴尙自ら本隊の兵二萬人を率ゐて陣し、又遠く山隈原にも兵を配し、前に沼澤の障碍を控へて官軍を俟つ。かくて兩軍相對峙したまゝ、月を踰えた。兩軍甚だ接近し、旗の紋を識別する程である。武光は金銀の日月打ちたる旗の蟬本に一枚の起請文を附して敵を辱た、是れ正平八年二日賴尙が筑前古浦城にて一色軍に包圍せられしを武光に救はれ、熊野牛王に血書して子孫七代まで菊池に弓を引き矢を放つべからずと認めたのであつた。八月に入り、武光は夜半奇兵を放つて迂回して敵の背後に出て、又本隊を以て敵の先陣に夜襲し、腹背相應じて敵を騷擾し、直に其中堅に激烈なる攻擊を加へんとしたのだ。六日夜壯士三百人を選び、弦月を蹈み、岩田の陣を發し、守備薄き得川の岸を敵の背後横隈附近に達し、所在に潛み、本隊が襲擊して喊聲の起るを待たしめた。本隊は同夜亥刻頃運動を始めた、武明これが將たり。日月の旗を先頭に立て、二千餘人鎧袖相摩して進む。第二陣は武信、武貫の率ゆる千五百騎。第三陣は武光の四千騎。第四陣は親王の三千騎。第五陣は新田の二千騎。右翼隊は名和、大野、溝口、木屋、草野の五千五百騎。左翼隊は同じく新田の一千騎、肅々として敵の一線を包圍すべく前進した。潛伏隊の一部は敵の巡邏に發見せられ、俄然鬨聲を揚げ火を放つて突喊す。少貳の陣忽ち混亂し、同志格鬪を始めた。潛伏隊は目的を達し、敵中を突過し、南方に進み、味方の第一線に合した。此時少貳軍混亂其極に達し、三百餘人同志打ちした。官軍の主力を五段に備へ、先陣武明は二千餘人を提げて驀然敵に接近し、潛伏隊の喊聲を合圖に喊聲を發したから敵の松浦原田の五千餘騎は周章混亂して退却した。此時官軍の右翼は松浦黨の後の沼を徒涉し敵の背面攻擊をした。此處でも敵兵狼狽し死傷者を遺棄して本陣に向つて退いた。中には方位を失し沼中に陷死せる者も甚だ多かつた。

已にして曉に達し、彼我の旗幟を確かむるに至つたので武明は直に進んで敵の前進隊に肉迫した。武藤之を見て兵七千を三隊に分ち、武明軍を包圍せんとした、武明少しも屈せず、其主力に突擊を加へた。敵は恐れて走る。直貫之を見て大いに怒り、二千餘騎を以て馳來つて之に當る、而も事急にして陣を立つるに遑なく、遂に武明に粉碎せられ自身も城井隆房に斬られた。之を見た胤信、賴信、泰助、泰親等三千餘騎を以て武明が側面に突入し悉く戰死した。官軍も武明、兵部太輔、岡三河守、庄美作、行喬以下百餘騎之に死んだ。第二陣の武信、武貫の千五百騎は賴泰、賴光の陣を擊つ、敵は二萬餘騎を十八隊に分ち、魚鱗に備へてをる、武貫手兵六百を以て直に進み、武信は九百を以て其後方より進む、兩隊電光の如く突入すれば、賴泰は壯兵五千餘を以て武信と戰ふ、岡上左馬助格鬪して賴泰を生捕る。官軍は武貫以下三百餘人戰死し、少貳軍亦損害多し。而して此方面には官軍千五百を以て敵の二萬を討ち東北方に走らせ、賴尙の本營に壓迫した。賴尙の本營には二萬の大軍が整然としてをる、之を見た官軍の士氣稍沮喪し、全軍動搖せんとした。

親王遙に兩隊の戰況を觀、武光の軍を合せて七千餘騎を提げ、自ら陣頭に立ち賴尙の本陣に突入し、其中堅を衝き給ふ。敵軍見て「將軍出たり〳〵射て落せ。」と呼ばはり、一齊射擊す。賴尙亦士卒を勵まし自ら陣頭に立ち兵二萬を以て官軍を包圍せんとす。冬綱亦二千五百を麾いて親王に迫る發射注ぐが如し、矢親王の左脇に中る、乘馬も亦射倒され、畏くも身に三創を被らせ給ふ、而も尙ほ身を挺して奮戰し給ふ。宇都宮隆房御側に駈け來つて之れに死す。其他日野、洞院、坊城、花山院、春日、北山、北畠、土御門、高辻、葉室等左右の臣咸な仆れ、御側の將士僅少となり、而も疲勞其極に達し刀を揮ふの力無く、皆親王を圍繞して鎧袖を翳して流矢を防ぐのみ。親王の御運命風前の燈火の如し。此時に當つて武光亦奮戰して親王を顧みる餘地なし。時に西方より一千餘騎殺倒し來る、是れ新田軍である。危急の際白刃を以て戰ふの暇無く、徒手以て格鬪した。親王爲に一道の血路を開き福童原に退き、水縄山谷山城に入らせ給ふ。

武光は親王が重傷を負ひ給ひ、左右の朝臣多く戰歿せると聞き大いに奮激し、「最早一人も生きて還つてはならん。日頃の約に違はず我と共に死ね。」と怒號しつゝ馬上に太刀を振翳し、自ら先頭に立つて進む。嫡子武政之れに續き、四千の士卒亦必死を期して奮戰す。敵勢之を見て一齊に射擊す、武光矢を蒙る蝟の如し、然れども鎧堅うして裏掻く矢無し、乘馬倒るれば、他の馬に乘り替へ、馳突縱横血戰十七合、向ふ所敵なし。被れる兜は落ち、髻切れて被髪面を覆ひ、目眥裂け、形貌阿修羅の如し、武藤之を見て己れ生擒せんと肉迫し來る、武光直に馬上に組んで共に墜ち、忽ち武藤の首を斬り、其兜を冠り、其馬を奪つて乘り「菊池肥後守武光少貳新左衛門武藤に天誅を加へたるぞ、主將のために奮ひ戰はん者は來れ。」と呼ばはりつゝ馬を躍らし賴尙の陣中に突入す。官軍の士氣大いに振ひ、敵陣ために色めき立つ、賴尙大いに愕き、退いて花立山を據守せんと馬首を東方に向くるや、四萬の大軍主將已に敗退すと誤認し、爰に總敗軍となり、周

筑後川合戰武光の大奮戰

韋狼狽馬市方面に潰走す、頼尙僅かに二十四騎を隨へ寶滿山に走る。武光尙ほ頼尙を花立山方面に追擊したが、山隈原の戰未だ止まざるを見て方向を轉じて敵の右側より之を衝く、是に於て北軍は全く潰亂し、此方面の敵は秋月方面へ退く。武光は兩方面の敵を尙深く追はんとしたが、官軍の損害も亦多大なれば之を止め、山隈原を貫流せる川（後世之を太刀洗川と名づく、現在飛行場）に血刀を洗ひ、諸軍を收めて高良山に歸陣し、尋で一旦菊池へ還つた。

抑大保原合戰は九州あつて以來の大合戰にして九州全土の豪族と稱し地頭と稱すべき者は悉く之に參加し、武家方の少貳軍六萬、宮方の官軍四萬、合せて十萬といふ大軍が一原野に血戰一晝夜に及んだといふのだから、恐らく九州と云はず本邦歷史あつて以來斯かる大合戰は後世の關ヶ原以外復とあるまい。而して武光の奮戰其功を奏して、此戰ひに大勝を得たといふ事から九州に於ける天下の形勢は已に定まり、遂に官軍の太宰府占領を見るに至つたのである。

一〇　太宰府占領と武光の武功

大保原戰に大勝を得たる武光は一旦菊池に歸城したが翌正平十五年正月より又活動を始め、先づ武安をして肥前の神崎、仁比山、佐賀、小城、松浦等の諸城を攻略せしめ。武光自ら少貳と松浦黨との連絡を斷たんとして志摩郡に入る。越えて四月肥後筑後の兵を糾合して太宰府を攻め。同十六年七月頼國を志摩郡細峰城に破り。天拜山に進んで火を放つて太宰府の頼尙が館を燒く。頼尙退いて陣を寶滿山に移す。武光太宰府に入り、次で博多を占領す。

八月六日武光油山に頼國を攻む。頼國敗走し少貳の一族多く此に死す。同七日武光姪濱に陣し、氏時冬資を糟屋郡青柳に攻む。氏時、冬資敗れて宗像城に退く。八日武光更に宗像城を攻む。大宮司力盡きて降り、冬資逃走す。武光之を逐ひ蘆屋、鬼津と急追せしにより諸軍潰走す。八月十六日武光、城武顯をして太宰府を攻めしむ。頼尙耐へず、再び寶滿山に退き、豐後に入り、大友氏に投ず。後遂に髮を剃つて隱遁すと云ふ、逆賊の末路や知るべしである。此に於て將軍宮は九州の中心たる太宰府に移り給ひ。爾來文中元年に至る十二年間征西府全盛時代にして、九國二島の官軍に號令し給ふ。

回顧すれば當時九州の天地多くは武家方に屬し、人みな眼前の利路に趍り、順逆の何たるをも辨ぜず、偶慷慨悲憤の士あるも多年の戰鬪に疲れて勇氣喪失せる際に當つて、獨り武光あつて毅然として屈せず、能く一族を率ゐて南征北伐數十年、其畫策着々功を奏し、少貳、大友、島津を服し、探題數人を卻ぞけ、鎭西を一統して征西府をして斯かる隆盛を見るに至らしめ、吉野朝後半の歷史に燦爛たる光輝を放たしめた、其功蹟實に偉大なりと謂つべしである。特に筑後川合戰に於て武光の抛身捨命的大活躍は後世史を讀む者をして感奮興起せしめ、覺えず膝を拍して快哉を叫ばしめるものがある。頼山陽の長篇の如き誦する者をして自ら志氣を鼓舞するに足る。（因に山陽の詩中「四世全節」の四世は歷世とすべきである。菊池氏の全節は四五世ではない。）

由來、武時の遺兒十數名は何づれも忠精凜々氣骨稜々其優劣を定め難いが、就中、武重、武敏、武澄、武光の如きは何づれも武勇絕倫の猛將であつた。後醍醐天皇にも十五人の皇

子あり何づれも英邁神武に在ましゝが、其南朝隨一の忠臣たる武時にも亦十六人の男子あり何づれも武勇絶倫であつたといふ事は一種の奇遇と云へばソレ迄であるが、君臣道合函蓋乾坤とは是等を云ふのであるまいか。

明治三十五年十一月十二日武光に從三位を贈らせ給ふ。

一一　武政の苦衷

斯くて正平十六年より前後十二年征西府全盛時代を過ぎ文中元年に至つて幕將今川貞世入道了俊の畫策着々成功し、八月十二日太宰府陷落、官軍は高良山に退却して、此處を策源地とした。同山は筑後平野に隆起して標高五百尺、筑後川に臨める軍略上頗る要害地である、今や官軍は此處に本營を設け武政、武義、武安及び五條、名和、黑木等の一族將軍宮に扈從して策戰計畫に努めた。其方略は敵が筑後川を渡つて南下せんとするを阻止し、一面には肥後、筑後、豐後の連絡を固くし、主として肥前方面に向つて運動を開始し、其方面の敵の勢力を殺いで太宰府を恢復せんとするに在つた。

文中二年二月十四日武義、武安等は夜に乘じて筑後川を渡り、肥前本折に進軍した。了俊、仲秋は毛利元春、田原氏能等の援けを得て、兵を進めて武義等と處々に戰つたが、菊池軍優勢にして敵し難く、本折城も支へ難きに瀕した、かくて菊池軍は今川軍の據れる諸城を襲擊し、軍容大いに振ふものあつたが、大局に於ては了俊の策略着々功を奏し、官軍の形勢日々に非となり、將士は離散し、勢次第に蹙つた。文中三年四月三日了俊は已に菅生に陣し、通忠等は六日筑後川の小田瀬を渡り生葉村に進入して火を放つた。菊池軍は直に出動し終日の激戰によつて之を擊退したが、其後兩軍の激戰は日々に繼續し、其間武政は重傷を負ひ五月二十六日三十左右の壯齡を以て歿した。

思ふに武政は父武光に隨ひ十數歲の弱冠を以て筑後川合戰に殊勳を立て、其他到る處攻城野戰に力め、或は將軍宮の帷幄に參じ、武光卒去後は全責任を引受けて多大の難局に當つて居たが、惜しい哉菊池家の棟梁たる事二年に足らずして歿した。實に官軍に取つても一大損失であつた。

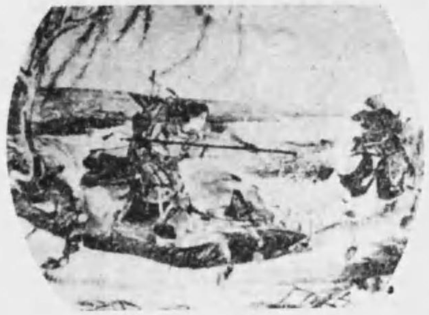
明治四十四年十一月十五日武政に從三位を贈らせ給ふ。

一二　賀々丸の奮鬪と水島合戰

武政の早世に由つて菊池家の家督を續いだは賀々丸（後の武朝）である、文中三年は未だ十二歲の少年ではあつたが、父祖の血を稟けて剛毅の氣象は眉宇の間に現はれ、末頼もしき少年であつた。當時賀々丸を輔けて拮据經營、內政に、防禦に當つてゐたのは武義（武時の末子）と武安とであつた。賀々丸の戰功を語れば、福童原に山內、毛利、深堀及び今川等と戰つたが、勝たずして懷良、良成兩親王を奉じて高良山を引上げ、菊池に歸つた。了俊は遂に肥後侵入を企て、先づ弟仲秋、其子義範を督して筑後の官軍石垣山城。水縄山。黑木。北河內等の各城を陷れて肥後に入る。其先鋒大友義臣、田原氏能等は有明海を南下し、小島城及び目野、千田、山本等の官軍を退け。同月十五日仲秋、義範は岩原山に右諸將と會合し。以て文中三年を終へた。岩原山は菊池平野の西端に屹立せる山である。

文中四年三月、了俊は谷川を發し、山鹿に着し、龍仙に陣す。四月八日日岡に移る。此に於て賀々丸は水島臺に進出した。臺は菊池の本城隈府の西一里にして菊池西面の咽喉である、以て了俊と相對峙した。天授元年七月十二日了俊は日岡を發し、水島城に迫つた。仲秋、義範其他諸將の大部隊は十三日朝、城の西南方を遠卷に布陣した。了俊は今度の戰ひは宮方武家兩軍勢力の分るゝ所と認め、島津、少貳、大友に書を送つて來援を需めた。大友親世は七十一回菊池と戰つて七十一回負けた男だから直に來た。島津氏久も來たが少貳冬資だけは來ない。冬資は賴尙の二男、少貳家の統領だ。由つて了俊は氏久に書を送つて利害を說き誘はせた、冬資遂に意を決してやつて來た。八月二十六日午刻了俊は冬資を己が陣營に招いて饗應した。而して宴酣なる頃山內通忠をして突然組伏せて刺殺した。元來計畫した仕事であつた。了俊は直に使を氏久に遣はし「自分が鎭西探題として其經營意の如くならないのは、冬資が宮方に貳心を抱き自分を支ふるからだ。是を以て斯くの如き沙汰に及んだ。委細は面會して詳述する。」と申送つた。實に不敵な事を行つたもので、了俊の老獪峻辣なる人物が赤裸々に現はれた。然も亦此一段の事は、了俊の明敏と果斷を證するものである。扨氏久は使を受けて往かざれば卑怯だといふて家來を連れて了俊の陣營に往き、

了俊の辯解を默然と聞いてゐたが、聞き畢ると只一言「承はつた」と言ひ棄てゝ自分の陣へ戻り、書狀を了俊に送つて絶を示し、決然として歸國した。氏久は此後菊池、少貳と連和し、南北朝の最後まで了俊に反抗した。



武朝了俊を水島臺に破る時に年十四

了俊が冬資を誘殺した事より、氏久先づ歸國し、其他九州の諸族も了俊の計策に事々疑懼を抱くやうになり、一般の人心動搖し、敗兆は既に現はれた。尋で筑後山崎方面の官軍蜂起したとの飛報が來た。了俊は長井貞廣、宇都宮親景、日田詮永等を急派して之を擊たしめたが、戰ひ敗れて討死した。

扨今川軍は九月六日夜から行動を始め、次第に水島臺に肉薄した。同八日先鋒一千五百騎は川を渡り、城麓の坂道を登りかゝつた。城中は靜まり返つて矢一筋も放たず、敵を思ふ圖に引付けた。菊池軍は俄かに吶喊して射伏せ突伏せ走り下る。敵は坂中から崩れ落ち、一方は迫間川の西鄕に追ひつめられ。一方は木野川に壓迫された。了俊、仲秋、義範は身方の不甲斐なきに大いに怒つて衆を勵まし盛返さんとするを、賀々丸は諸將と倶に二千餘騎を督して群がる敵中に斬込んだ。爲に今川軍は瞬く間に千二百人の死傷者を出し、全軍潰亂し、了俊は殘兵を督して退却山鹿から玉名に入り、官軍の猛烈な追擊に應戰しつゝ、大津山關を越え、筑後に入り、瀨高、蒲地、酒見、筑後川、横大路、國府を經て武雄の塚崎城まで退いた。退くも退いたものだが追ふも能く逐ふたものだ。水島合戰に一敗地に塗れた了俊は五ヶ年の計略半徒勞に歸し。菊池は再び勢力を得、官軍九州を風靡し、鎭西再度の靜謐を來した。了俊の機智縱横を以てして足利天下といふ背景を有し乍ら、歷代の探題が啣つた九州鎭定難を繰返した譯だ。

一三　武義武安の武功と蜷打合戰

水島臺に於て了俊を破つた賀々丸は幾程もなく、後征西將軍宮良成親王を奉じ、武義、武安等の俊豪を率ゐて肥前國府を占領し、威勢大いに振つた。了俊は背振山に壘を築いて戰ひを交へない。大内氏の來援を待ち。阿蘇惟村を促し。滿範を肥後に遣はし、菊池を牽制した。又大内軍と連絡せんとして仲秋をして松浦黨を隨へ、博多に向はしめた。賀々丸は直に肥後守護代武國及び武元をして之を遮らしめ、大いに仲秋の軍を破つた。仲秋は再び肥前に逃入した。時に天授二年九月であつた。此戰ひは頗る重要の戰ひであつた。大内義弘は豐後の大友親世と策應しつゝ、處々に官軍を破つて西進し、中國の吉川經見も之れに投じ、茲に兩豐及び中國の聯合軍は遂に了俊、仲秋、義範と連絡し、其勢全九州を壓するの盛觀があつた。

菊池は少貳、島津と連絡し、天授三年正月十三日佐賀平野なる千布蜷打に於て一大激戰は開始された。時に灰色の雲低く、風雪紛々として甲冑に滿つ、兩軍吶喊して接戰した。賀々丸時に年十五、親王は十六、七、倶に陣頭に立ち奮戰せらる。然るに兵數に於ても遙かに多く、且つ新來の大内勢の鋭鋒當り難く、ために官軍は散々に斬立てられ、菊池の柱石武安、武義、阿蘇惟武等枕を並べて戰死し、其他一族郎從多く戰歿した。此に於て賀々丸は恨を呑んで親王を奉じて些かに身を以て遁れた。此一戰は兩軍死活の分るゝ所で、菊池も一族擧つて出征したが、一敗地に塗れたは實に千歲の遺憾であつた。多大の損害を蒙りし菊池は、其後勢力衰頽し永く肥前筑前の野に進出する事不可能となつた。

昭和三年十一月十日武安に從三位を贈らせ給ふ。武義は未贈位。

一四　菊池城陷落

蜷打合戰に一敗地に塗れた菊池軍は爾後白木原の戰ひに植田宮自刄し給ひ。菊池一族以下百餘人壯烈なる戰死を遂げ、天授四年九月託摩原の激戰には親王及び武朝一大奮戰の結果今川方全敗して筑後方面へ退却した。而も又天授五年には仲秋來つて合志郡板井に布陣し諸城を攻擊した。同六年には了俊自ら板井原の本陣に着し、畫策する所あり、阿蘇惟村の南郡方面の戰ひを擱いて來援せん事を促す等、一意菊池を全滅せんことに專念した。かくて今川軍は勢力彌强大となり、今や板井原の陣營には大友、大内、毛利、深堀等を首め、中國九州の大軍屯營し、將に菊池を一呑にせん氣勢を示し

た。されど了俊は大事を取つて輕々に動かない。漸く十月八日に至つて水島臺を襲ふた、臺には鬼肥前武照あつて能く防戰した。かくて此歳も暮れ翌弘和元年となり、今川軍は兵勢益〻盛んに、四月廿二日仲秋は城野城を攻むること六晝夜。武直、武鄕、武方等防戰に努めたが廿六日に至つて陷落した。之と前後して山鹿の吾平城、河内城も落ちた。仲秋は菊池の本據に侵入し奮戰したが衆寡終に敵し難く、勇勝猛卒枕を並べて斃れ、今年十九歳の武朝も涙を呑んで間道より遁れた。了俊は聖朝直に親王の據り給へる染土城を攻めた。親王は「たけ」と呼ぶ深山に遁れさせ給ふた。顧れば顯德二年了俊九州に下つてより茲に十ヶ年、其間肥後に侵入する事數回、而も菊池は何時も寡を以て衆を搏ち、屢强敵を擊退したが、天授五年より三年に亙る大規模の攻圍は遂に破り難く、加ふるに股肱の人物多く戰沒し、若年の武朝の勞苦言はん方なし、局面益〻困難となり、如何に精神的に團結し、忠雄義烈の念燃ゆるが如き菊池一族も、寡兵を以て中國及び九州の大兵には抗し難く、外城は引續いて陷落し、遂に本城をも敵手に委するに至つたことは如何に時勢とは云ひ乍ら悲憤慷慨の至りである。其後も武朝は親王を奉じて河尻、宇土兩城に據つたが、元中七年九月是れ亦了俊のために攻陷せられ、親王を奉じて八代の名和顯興の許に避けた。翌八年名和も攻められたので、親王は高田御所に隱栖し給ふた。

元中九年南北合一成るや、八代高田御所に在せし親王は筑後の矢部山中に移り給ひ。武朝は菊池に歸城した。時に年三十歳、幕府は武朝の肥後守たる事を承認した。而して親王及び武朝は依然として元中の年號を用ひ何處までも足利幕府に屈しなかつた。希代の策士了俊は遂に所期の目的を達し菊池本城まで陷れたが、少貳に怨まれ。島津に去られ。南北合一後は大友に讒搆せられ。應永二年に京都へ召還せられて駿河の領地に赴いたが此處でも甥泰範の讒を受け。義弘の叛きし時參洛遲かりしとて義滿に疑はれ、爾後連りに讒搆せられ、相模に走り。遠州に移り。再び上京したが間もなくして還り、怏々として餘生を送つた。天命の歸する所、因果の循る所大忠臣を苦しめし逆賊の末路や哀むべしだ。

抑〻、菊池氏の戰史を讀むに、筑後川大戰の外、悲痛痛快合せ感ずるものなきに非ざるも、而も其多くは非劇慘劇にして殊に武朝時代に入つて已來は彼の老獪なる今川了俊に對抗せし所以でもあるが、實に涙無くしては讀めないものが多々ある。菊池城沒落の如きは其最なるものであらう。設し武時、武重を以て大楠公に比し得るならば、武朝は小楠公に比すべきだが、而も四條縄手戰よりも菊池城の陷落は一層の悲劇である。

明治四十四年十一月十五日武朝に從三位を贈らせ給ふ。

武朝了俊に大の軍を破る時に原摩に託して討死六十年

一五　重朝と菊池文學

廿一代重朝は文正元年十七歳にして父爲邦の跡を繼ぎ從四位下肥後守に任ぜられ、隈府城に居り、肥後全國を支配し、阿蘇、相良氏の如きも菊池氏の命を奉ぜしと云ふ。室町氏の季摂紳博士衰替し、僧徒の外文學者に志す無き時、重朝は父祖の思想を繼ぎ、儒學參禪に志深

重朝孔子堂を建て聖學を講ず

く、文學を國中に普及し、父爲邦老臣隈部忠直と謀り、文明四年二月城麓迫間川左岸に孔子廟を建て、孔子及び十哲の像を祭り、一藩の將士を集めて聖學を講究した。上の好む所下之より甚だしきはなく、文運燦然として一藩を壓するに至つた。

抑〻菊池文學の根源深く、武時、武重、武茂、武敏、武光、武士、武尚、武安、武照等の大智に於ける。武光の大方。武政の如瑤。武朝の賓中に於けるが如き、何づれも入元入明の博學高僧に親炙して名節を礪砥した。加旃、前後數年征西將軍宮兩親王御座あり。且又其近侍に累代明經の儒官たりし五條氏等がゐて、其學德の感化頗る大なるものがあつた。且又武政以來大陸の文明輸入して四書の如きも早くから行はれてゐたといふ。重朝の送季材和尚の詩に「驛路超々萬里路、長安到日定如何、天顏咫尺五雲上。著紫伽梨拜詔書。」といふあり、季世曰く「美なる哉此詩、誠に微意あり、謂ゆる天顏五雲はそれ諸藩に處して闕を戀ふるの心、大節菊池公の如き今に於て稀に見る者なり。」と、以て重朝の蘊藉を窺ふべしだ。又當時日本一の稱を縱ひまゝにした大學者桂菴は文明八年年五十、九州に遊び、菊池に來り城外二愛亭に淹留し、重朝の請に由つて親しく藩學に臨めりと云ふ。又翌九年二月九日重朝國内の將士僧徒を集め、盛大なる釋奠を行ひ桂菴詩を作つて賀すといふ。又重朝には隈部忠直といふ良輔があつて教育行政共に能く行き屆いた。忠直は持朝、爲邦、重朝の三代に歷仕し「最も武略を以て稱せられ、兼て文雅あり」と稱せられた程である。桂菴來つて菊池の文教彌盛んなるを聞くや、薩摩の島津氏は使を菊池に遣はして之を招聘した。重朝又斯道のために之を慫慂せしにより桂菴遂に薩摩に入る。然れば薩藩の宋學は桂菴に始まるといふべし。而して德川氏の始め藤原惺窩薩摩に入り桂菴の學統を稟け、後江戸に出でゝ旺に之を唱ふ、然れば中央地方共に宋學の興る菊池文學に負ふ所尠しとせずといふべし。而も又明治維新の際薩藩の勤王の先驅を爲すや、多くは此宋學に志せる者に據るといふ、然れば菊池文學の功彌大なるものありと云ふべしだ。

一六　菊池一族と師匠

大智

前來大智の話は頗る片鱗的に出たが前後三十六年に涉つての關係を綜合的に見る必要があらう、さうして後始めて菊池一族の一致團結同心協力した其精神的結合の淵源する處を知る事が出來やう。

欽シミ稽フルニ我大智禪師ハ州ノ宇土郡長崎村ニ生レ資性慧悟髫年ニシテ　後鳥羽天皇ノ皇子法皇長老義尹ニ受業尹滅後遊方釋運紹明等ヲ訪ヒ遂ニ加州大乘寺紹瑾ニ投ジテ機緣相契ヒ屢印可ヲ蒙ムル瑾ハ卽チ總持寺開山勅諡常濟大師ニシテ嘗テ　後醍醐天皇ノ寵遇ヲ忝ウシ總持寺ヲ曹洞出世道場ニ補シ賜紫勅願ノ允許ヲ蒙ル大智紹瑾ニ侍スルコト有年正和三年入元古林茂雲外岫中峰本無見觀等ニ參見咸ナ大器他參ヲ以テ稱セラル在元十餘年徧ネク祖塔ヲ禮シ廣ク靈區ヲ探ル五湖ノ風致他マデ胸宇ニ灑ギ諸山ノ耆宿勘驗セザルナシ便チ衣ヲ捲テ歸ヲ催ス英宗帝詔シテ舶ニ駕セシム既ニシテ解纜洋程マサニ半バナラントシテ黑風船ヲ簸テ檣傾キ櫂摧ケテ身命殆ンド危ウシテ高麗ニ飄着偶ヲ賦シテ彼王ニ呈ス王舟ヲ艤ヒ禮シテ之ヲ送ル便チ加州宮ノ腰ノ津ニ着時ニ正中元年ナリ徑チニ紹瑾ヲ省勤ス瑾命ジテ法ヲ明峰ニ嗣ガシム爾來茅ヲ同州河内莊吉野鄕ニ結ンデ閒居其地峰巒環匝、溪壑宏深以テ聖胎長養ニ便ス然レドモ麝ノ迯ルル所德香掩ヒ難シ學侶川輳未ダ幾クナラズシテ蔚トシテ叢社トナル師子山祇陀寺是ナリ已ニシテ道聲遐邇ニ聞シ本州菊池武時鳳儀山聖護寺ヲ創メテ師ヲ請ス師其勝境ヲ愛シテ影山ヲ下ラザルコト殆ンド二十年ソノ淸標高致以テ想見スベシ而シテ此間武時、覺勝、武重、武敏、武茂、武澄、武敏、武光武豐、武貞、時基、武世、惟武、武士、武安等ノ菊池一族ハ每夕馬ヲ連ネテ參禪殆ンド專門的薰陶ヲ受ケタリト云フ抑大智ノ菊池氏ニ於ケル尋常一樣師檀ノ慇篤ニハアラズ武時、武重等ノ氣宇ノ世ニ勝レ其ノ王事ニ任ズルニ堪ヘタルヲ見ルヤ　大智ハ之レニ徹底的薰陶ヲ試ミタリ而モ單ニ禪道佛法ノ提撕ニ止メズ我ガ國體ノ尊嚴無比ニシテ宇内ニ冠絕セル所以ノモノハ上萬世一系ノ聖天子ヲ戴キ下臣民ハ往昔ノ天子ノ後胤若クハソノ臣下タリシ者ノ末裔雲孫ニシテ義ハ君臣ニシテ情ハ父子情ハ父子ニシテ義ハ君臣コノ微妙ナル關係ハ世界萬國ニ其比類ヲ絕セルモノ我皇國特有ノ獨尊無二ナル處ナリ然ルニ斯ノ上下君臣渾然一團ヲ爲セル國柄

ニ近世ニ至リ君君タリ臣臣タリノ萬古不變ノ眞理ヲ忘レ臣トシテ君ヲ換ヘ下トシテ上ヲ侵スガ如キ大逆無道人面獸心ノ徒ガ現ハレ而モ此大逆無道人面獸心ノ徒ガ方今五畿七道ノ間ニ横行シ前後踵スヲ接シテ轉タ逆徒猖獗タルモノアリ大イニ警誡スベキ時節ナリ弓箭ノ家ニ生レ朝廷ノ武臣トシテ當世樣ノ武士ニ交リ利ニ奔リ勢ニ附イテ君臣ノ大義ヲモ辨セズ順逆ノ何タルヲモ知ラズ向背恒無ク徒ラニ驢前馬後ノ漢トナツテ朝附暮叛何等節操ノ認ムベキ無ク萍草ノ常止スル處ナキガ如クナルベケンヤ弓箭家ノ本領ハ一朝有事ノ際ニハイザ鎌倉ニアラズイザ朝廷ノ御爲ニ一身一家ヲ擧ケテ節ニ殉ジ義ニ殪レルトイフ一大覺悟大丈夫ノ氣魄ヲ要スト敎ユルニ武士道ノ本義勤王ノ大節ヲ以テセリ今其證據數件ヲ擧ゲンニ武重ノ大智ニ納レタル文「天下ノ御大事ハ内談ノ議定アリトイフトモ落居ノ段ハ武重ガ所存ニ落シ着クベシ」是レ何タル痛快事ゾ大智平生ノ敎誡此ニ到ツテ金的ヲ射ルモノトイフベシ又云ク「内談衆一統シテ(中略)山ヲ尙ンテ五常ノ義ヲ磨シ家門正法ト俱ニ龍華ノ曉ニ及バンコトヲ念願スベシ」山トハ大智所居ノ鳳儀山ナリ又又云ク「大智上人深山仙跡ノ地ニ於テ佛祖ノ正法ヲ紹隆シ給フ宿願深重ニマシマス間武重清淨堅固ノ信心ヲ發シテ當山ノ事ハ盡未來際大智上人ニ寄附シ奉ル所ナリ(中略)伏シテ願クハ佛祖加持護念シ給ヒテ家門久シク盛リニ子孫廷臣トシテ武略ヲ天道ニ守ツテ永ク本朝ノ鎭將タラン依ツテ忠ヲ朝家ニ致シテ正法ヲ護持シ奉ラン」其他武茂、武敏、武澄、武士、武光、武安等ノ起請文毎ニ「天長地久」「金輪聖主寶祚延長天下泰平令法久住」ト書セザルナシ而シテ是等ヲ統一セル管領武茂ノ文ニ「武茂弓箭ノ家ニ生レテ朝家ニ仕フル身タル間天道ニ應ジ朝恩ニ浴シテ身ヲ立セン(中略)私ノ名聞己ガ欲ノタメニ義ヲ忘レ恥ヲ顧ミズ當世世ニ諂ヘル武士ノ心ヲ長ク離ルベク候(中略)愚闇ノ身錯マリ候ハントキハ御諫ニ應ジテヤガテ正路ニ本ヅクベク候聽聞正法ノ深恩ヲ報謝シ奉ランガタメニ生生世世正法紹隆マシマシ候ハン時ハ必ズ一世ニ生レ値ヒ奉ツテ正法ニ信心ヲ發シ師弟ノ緣ヲ結バン(中略)若シ斯ノ起請文ノ旨ヲ壞リ候ハバ三寶佛祖

天龍護法善神ノ冥罰ヲ武茂ガ八萬四千ノ毛孔ゴトニ罷リ蒙ツテ今生ニハ白癩黑癩ノ病ヲ受ケ當來ニハ七世マデ佛法ニ値ヒ奉ルベカラズ」又武士ノ書ニ「何レノ兄弟一族ノ中ニ於テ仕朝ノ器用タルベキ仁ヲ撰ンデ當家ヲ繼ガシメ給ハルベク」「ソコノ御ハカラヒトシテ何レノ兄弟一族ノ中ニ器量ト候ハン者ニアテ給ハリ候ベク候」是等ヲ綜合考察スレバ大智ハ單ナル佛學ノ師ニアラズ一家一門ノ高等顧問トシテ菊池家ノ首領相續人選定權マデモ擔任セシナリ是レ必ズ武時、武重ノ遺囑ニ由ル所ナランモ或ハ朝廷トノ間ニ或ハ征西將軍宮トノ間ニ介在シテ執奏内請等ノ事ヲ幹セシユエニ此處ニ到リシ所以ヲ識ラズンバアルベカラズ

抑菊池氏ハ曩祖則隆以來前後五百年廿四代ヲ通ジテ皇室中心主義ヲ執ツテ確乎不拔ソノ幾十百ノ一家一門カラ一人ノ違叛者ヲ出サズ殊ニ九州ノ偏境ニ處シテ四面楚歌逆徒猖獗タル中ニ卓ツテ孤忠ヲ捧ゲテ南朝ト與ニ運命ヲ終始シ未タ嘗テ榮辱ヲ以テ其節ヲ變ゼザリキソノ純情赤誠前後ノ武族ニ未ダ嘗テ見ザルモノアリ殊ニ武朝ガ幼弱ノ身ヲ以テ南風競ハザルノ秋ニ當ツテ尙ホ能ク父祖ノ遺訓ヲ奉ジ苦節ヲ艱難變故ノ間ニ竭シ逆賊今川軍ノ驕威ニ屈セザリシガ如キ正氣凛然鬼神ヲ泣カシムルモノアリ又重朝ガ室町氏ノ季世ニ孔子廟ヲ城麓ニ營ミ一藩ノ子弟ヲシテ聖賢ノ道ニ參ゼシメタルガ如キ亦名敎ヲ萬世ノ下ニ維持スルニ足ルモノアリ斯クノ如キ功績ヲ思召サレ明治元年ニハ祠廟祭祀ヲ命ジ給ヒ同十一年別格官幣社ニ御昇格同十六年武時ニ從三位ヲ贈ラセ給ヒ同十七年嫡流武臣ニ男爵ヲ授ケ給ヒ同三十五年武時ニ從一位ヲ武重　武光ニ從三位ヲ贈ラセ給ヒ同四十四年武政　武朝ニ從三位ヲ贈ラセ給ヒ大正四年武房　武敏ニ從三位ヲ贈ラセ給ヒ同五年重朝ニ正四位ヲ贈ラセ

熊本縣隈府町菊池神社神門

給ヒ同十三年ニ覺勝ニ正三位ヲ武澄　武吉ニ從三位ヲ贈ラセ給ヒ昭和三年武安ニ從三位ヲ贈ラセ給フ斯クノ如ク一家族ニシテ十二人マデモ御贈位ヲ忝フセシコトハ實ニ是レ前代未聞ノ盛事一家一門ノ名譽何物カ之レニ加ンヤ實ニコレ聖恩枯骨ニ及ブト稱スベキモノ歟斯ク菊池氏ガ皇朝ノ前後ニソノ類例ヲ見ザル名譽ヲ博シタル所以ノモノハ他ナシ彼ノ一家一族ガ能ク一致團結同心協力セシ結果タラズンバアラズ而シテ此一致團結同心協力セシ內面ニハ根源深キ思想信仰ガ彼ノ一家一族間ニ流レ居リシコトハ言ヲ俟タザル所ナリ而シテ其思想信仰ノ對象トナリシモノハ他ナシ師匠大智是ナリ大智　四十一歲ヨリ七十八歲マデ前後三十七年間殆ンド彼ガ生涯ヲ竭シテ薰陶努力セシ功績ガ能ク此菊池一門ヲシテ一致團結同心協力セシメ一致團結同心協力セシメシ結果能ク斯クノ如キノ功動ヲ策テ斯クノ如キノ名譽ヲ博セシメタリシナリ況ンヤ又大智ノ敎化ハ單ニ菊池一族ニ止マラズ有馬直澄、大藏種國、長谷部信經、平澄隆等ニ及ンデ何レモ朝廷ノ御爲ニ忠勤ヲ擢ンズベキコトヲ敎誡セリ由テ彼等何レモ弟子ノ禮ヲ採リ　金輪聖主寶祚延長天長地久ヲ祝禱シテ起請文ヲ納メザルナシ之ヲ要スルニ　大智ノ思想ハ曩祖永平ヨリ遞代稟ケ來ツタ醇乎トシテ醇ナル皇室中心思想ニシテ當時日本國中ニ橫溢セル武家中心幕政謳歌思想ヲ徹底的ニ喝破シ打破セントシテ同ジク曩祖以來ノ家風タル地方山澤ノ間ニ一箇半箇眞箇ノ英靈漢ヲ索メ是レニ撤底的根本的薰陶ヲ施シテ以テ他日撥亂反正ノ資ニ供セント念願セリ由ツテ彼ノ菊池其他ノ起請文及ビ武重ニ與ヘタリト傳フル假名法語等ハ其反響若クハ其思想ノ斷片トシテ之ヲ立證シテ餘リアルモノト云フベシ

上來大智ノ俗諦的世間的功績ノ一斑ヲ縷述セリ更ニ眞諦的出世間的道德鴻業ヲ一瞥センニ　大智ノ親友別源圓旨　大智像讃ニ云ク「大陽ノ遠識ニ應ジ洞山ノ孤宗ヲ興ス今時ノ弊ヲ破リ古道ノ風ヲ回ス新豐ノ曲一タビ唱ヘテ鄭衞ノ音忽チ空シ獅子吼聲振ツテ群狐迥トシテ蹤ヲ絕ス四處ノ罏鞴ヲ開イテ凡ヲ烹リ聖ヲ烹リ漫天ノ網羅ヲ張ツテ鳳ヲ打シ龍ヲ打ス云云」又彼傳法師明峰云ク「大智首座壯年ヨリ以來文字ノ學ヲ絕シ解脫ノ道ヲ慕ヒ（中略）和漢兩朝ニ尋師訪道操履ヲ古人ニ學ビ志氣ヲ千聖ニ類シ深ク宗門ノ棟梁ニ上ランコトヲ願ヒ進ンデ洞水ノ嫡流ヲ汲マント欲ス（中略）昔年先師ノ密室ニ詣シテ佛祖ノ正脈ヲ傳授シ今日老僧ノ堂奧ニ入ツテ自家ノ大事ヲ決擇ス實ニ是レ椙樹ノ第一枝永光ノ正傳燈ナリ燈燈連續シ枝枝繁榮シ周ネク扶桑ヲ覆ヒ遠ク萬古ニ傳ヘン云云」師トシテ弟子ヲ讃美シ祝福スル蓋シコレ以上ノ語ハナカルベシ大智ノ爲人大智ノ道風ヤ知ルベシ

更ニ眼ヲ轉ジテ大智禪師偈頌ヲ一瞥スベシ僅カニ五十番一卷二百二十九首ナレドモ此偈頌ガ如何ニ巧妙絕唱ニシテ古今學者ノ珍翫ニ價ヒシ學界ヲ賑ハシ思想界ニ及ボセル感化功績ハ蓋シ想像ノ外ナルモノアラン且ラク此集ノ重板及ビ注解書ノ續出シテ各幾十版ヲ重ネタルヲ見テ以テ其一斑ヲ識ルベキナリ

前言ノ叨叨タル頗ル我佛尊トシノ嫌ヒナキニ非ズ然リトイヘドモ亦一言ノ誇張浮說ナシ事實ヲ記述セルノミ

純忠菊池氏　終

昭和八年四月一日印刷
昭和八年四月五日發行

（非賣品）

長崎市寺町
皓臺寺
著作兼發行人　村上素道

京都市下京區西洞院七條南入
印刷人　內外出版印刷株式會社
代表者　須磨勘兵衛

發行所　長崎市寺町
皓臺寺

終